幼児期の親子ダンス教室における子どもの成長に対する母親の意識調査

A Survey of Mothers' Opinions about Growth of their Children though Parent-Child Dance classes for Infants

キーワード：親子ダンス、子どもの成長、発育・発達

和田　春恵

Ⅰ．研究目的

筆者は東京都国立市において、平成16年度から地域住民を対象に「親子ダンス教室」を開き指導している。この教室は4月からの年度を区切りとして、毎年度新しいメンバーが加わってくる。年齢制限はないが、幼稚園・保育園に入園するまでの歩くことができる幼児とその母親が主な対象となっている。マーラー[1)]は、2歳頃までの子どもと母親との関係を分離固体化理論として次のように分割している。

① 自閉期（新生時期）
② 共生期（生後4ヵ月頃まで）
③ 分離固体期
　③－1 移行期（生後10ヵ月頃まで）
　③－2 練習期（1歳頃まで）
　③－3 再接近期（1歳半から2歳頃まで）

本研究の対象は主に「再接近期」の幼児であり、この期の幼児が成長する過程とそれに伴う母親の役割については、次のように述べられている。『探究心は旺盛になり、言葉による自己表現が可能となって、自己主張したり気にいらないときにはだだをこねるようになる。自我発達したことで逆に不安という感情にも気づき、母親にまとわりつくようになる。（中略）わがままと強烈な愛着行動を混在して示すので、母親にとっては対応が困難となる時期でもある。（中略）母親は親としての発達過程の試練の時期でもある。母親は、子どもがまとわりついてくることを受け止めながら、自ら子どもとの距離をとり、人間関係をお互いに学んでいくのである。接近しすぎず、回避もせずにお互いが安定した距離をとるようになると、その後の対人関係が発達し、子どもも穏やかに落ち着いてくる。』

筆者は5年間の経験の中で、様々な幼児が成長・発達していく様子や母親との関係を構築していく様子を見てきた。もちろん、親子のコミュニケーションがうまくいき、子どもへの対応に苦慮する様子がみられない母親もいる。しかし、たいていの母親は、何らかの形で、「母親としての試練の時」を迎えているように見受けられる。そこで本研究では、親子ダンス教室が子どもの成長・発達と母親との関係構築に与える効果について、母親自身がどのように捉えているのかを調査し、また親子ダンス教室の活動内容との関連を検討することを目的とした。

Ⅱ．研究方法

1．研究期間および対象

平成20年度および平成21年度における親子ダンス教室受講者10組を対象とし、母親に対し17ヶ月あるいは5ヶ月経過後の平成21年9月に次項のアンケート調査を行った。表1に、子どもの年齢（平成21年4月時点）・性別・入会目的・日々の活動状況を示した。対象AからJの下の括弧内は入会年度である。子どもの年齢は1歳5ヶ月から2歳9ヶ月であり、男児3名、女児7名であった。入会目的は、集団生活を経験させる、親子で楽しむ、体を動かすことをさせる、などであった。

表1　親子ダンス教室受講者の基本調査結果

対象	年齢	性別	入会目的	日々の活動状況
A（H21）	1歳5ヶ月	女	集団の中で過ごすことで良い刺激になると思った	・兄の真似　・電車ごっこ　・公園で滑り台
B（H21）	1歳8ヶ月	男	親子で楽しめることをしたい	・テレビを見る　・兄と一緒に踊る　・おもちゃで遊ぶ
C（H21）	2歳1ヶ月	女	同年齢のお友達と接する機会を作ってあげたい	・公園で遊ぶ　・姉と踊る　・ごっこ遊び
D（H20）	2歳1ヶ月	女	体を動かすことをさせたい	・兄とレンジャーごっこ　・ままごと　・ボール遊び
E（H21）	2歳2ヶ月	男	親子で楽しみたい	・公園で遊ぶ　・家で積み木やブロック遊び
F（H21）	2歳3ヶ月	男	集団生活をさせたい	・テレビを見る　・兄とたたかいごっこ
G（H21）	2歳5ヶ月	女	習い事をさせたい	・DVDやテレビ観賞　・ままごと　・本を読む
H（H21）	2歳6ヶ月	女	親子で一緒にできることをしたい。また、集団の中で皆と同じことをするのが苦手なため	・公園で遊ぶ　・ままごと　・姉の習い事についていく
I（H20）	2歳8ヶ月	女	体を動かすことが好きだから	・兄とままごと　・公園で兄のお友達と遊ぶ
J（H20）	2歳9ヶ月	女	たくさんの友達の中で自分らしく過ごせるようになってほしい	・公園で遊ぶ　・兄とカード遊び　・ごっこ遊び　・ままごと

2.　親子ダンス教室のプログラムと調査内容

表2に親子ダンス教室の活動内容と指導上の留意点および期待される効果を示した。活動時間は週1回60分間であった。親子ダンス教室を受講して子どもおよび親子関係が変化したと思われる点について、母親に対してアンケート調査を行った。調査内容は以下の通りである。

①日頃の遊びの変化
②親子のコミュニケーションのとり方の変化
③子どもの性格の変化
④積極性、自主性、協調性、創造力の変化

なお、上記①から③は面接法により、④については質問紙法（3段階評価）により行った。調査結果は、幼児期では発育・発達レベルの違いが大きいため、対象者個々について記載した。

Ⅲ．結果

母親に対するアンケート調査の結果は次の通りである。

1.　日頃の遊び、親子のコミュニケーションのとり方、子どもの性格の変化

①対象A（1歳5ヶ月～1歳10ヶ月：女児）

日々の活動は、踊りながら遊ぶようになった。親子のコミュニケーションのとり方が変わり、愚図ったときに「アンパンマンの手遊び」をやると機嫌を直すようになった。性格は、元々明朗で活発ではあったが、より一層活発になった。

②対象B（1歳8ヶ月～2歳1ヶ月：男児）

一緒に歌ったり踊ったり、本を読んだりボールを投げたりと、何でも母親と一緒に遊ぶようになり、スキンシップをとるようになった。性格は、元々明朗で活発であったが、より一層活発になってきた。

③対象C（2歳1ヶ月～2歳6ヶ月：女児）

集団の中で活動することにより、友達と仲良く遊べるようになった。機嫌の悪い時に手遊びをすると機嫌を直すようになった。性格は、4月と変わらずおとなしい。

④対象D（2歳1ヶ月～2歳6ヶ月：女児）

1年経過後の4月に比べ、音楽を聴き、歌ったり踊ったりするようになった。また、8月（2歳5ヶ月）頃から踊るときに母親を誘うようになり、親子のコミュニ

表2　親子ダンス教室のプログラム（60分間）

項目	活動内容	詳細内容・指導上の留意点	期待される効果
挨拶	挨拶 自己紹介 好きな物の名前	『気をつけ、ピッ!』と声を掛け、正しい姿勢をとらせる。『おはようございます』、『おねがいします』と大きな声で挨拶をさせる。自己紹介や好きな物の名前は、時間がかかってもゆっくり考えさせる	「気をつけ」の正しい姿勢がとれ、大きな声で挨拶ができるようになる。日々の生活体験の中から自分が好きな物を考え、その形や動きを発表することで、表現力や模倣する力、創造力が養われる
手遊び	「グーチョキパー」 「アンパンマン」 「げんこつ山のたぬきさん」 「お弁当ばこ」 「パンダ・うさぎ・コアラ」	『グーチョキパーをやりたい人は手を挙げて!』と声を掛け、積極性を促す。時間がかかってもゆっくり考えさせる。形が発表されたら、全員でその形を表現させる。例えば「ちょうちょ」なら、「ちょうちょ」を歌いながら手をひらひらさせ、「かたつむり」ならニョロニョロと言いながら床を這って進ませる	積極的に手を挙げて、右手、左手の組み合わせを自分で考え発表することにより、自主性、積極性、創造力が養われる
		「アンパンマン」は、徐々にスピードアップ	スピードアップしていく動きに合わせることで、集中力とリズム感が養われる
リズム運動	①ウォームアップ	『1、2、3、4、5、6、7、8』と全員で号令を掛けさせストレッチ	音楽が流れる中で、友達と声を合わせて号令を掛けながら動くことにより、リズム感が養われる
	②歩く動作とグーパ・ケンパの組み合わせ	『歩いて歩いてグーパ!・ケンパ!』と声を掛けさせ自由な方向に移動	声を出しながら様々なステップを踏むことにより、集中力とリズム感が養われる
	③「車の運転手」に変身	『青は進め、黄色はゆっくり止まれ、赤は動かない』と、指導者の声に従って動かす。信号を説明し、守らせる	信号を理解することで、安全面に気をつけることができるようになる
	④手押し車	壁に向かって腕立て→床で腕立て→手押し車。床にしっかり手をつかせる	腕力、腹筋・背筋力が向上
	⑤ハイハイ	母親達で円を作り四つん這いになり、子どもは母親の下をハイハイしながらくぐって1周	母親から離れて活動することができるようになる。腕力が向上
	⑥ジャンプ	母親達で円を作り長座する。子どもは大人に両手を持ってもらい脚を飛び越して1周	脚を踏まないように注意しながらジャンプすることで集中力、脚力が養われる。また、母親以外の大人と手を繋ぐことにより、様々な活動がしやすくなる
	⑦母親の腹筋運動の手伝い	子どもを母親の脚の上に座らせ、母親の腹筋運動の応援をさせる。母親は起き上がったら子どもを抱きしめる	親子のスキンシップが高められる
	⑧ボール遊び	母親達が交代しながらゴールになり、子どもは順番にゴールに向かってキック	ゴールを見ながらボールをキックすることで集中力が養われる
リズムダンス	「アブラハム」 「くまのプーさん」 「ミッキーマウスクラブ」 「崖の上のポニョ」 「アンダーザシー」 「小さな世界」 「アンパンマン体操」	「アブラハム」では、歌詞にある「右手、左手、右脚、左脚、頭、お尻、回って」の7ヶ所の中から自分で担当したい部分を選ばせ、前に出てリード	自主性、積極性、創造力が養われる
		作品ごとにキャラクターシールを貼ることで、キャラクターになりきって楽しくリズミカルに踊らせる。「アンパンマン体操」では、シールを子ども一人で取りに来させ、8つのキャラクターの中から自分と母親の分を選ばせる。また、お面をかぶったりポンポンを持って踊らせる。作品によっては、他の子どもと手をつなぎ輪になって踊らせる	様々なダンスの振りを、見本を見ながらしっかり覚えることにより集中力やリズム感が養われる
クールダウン	全身のストレッチ 深呼吸	仰向けで手足を振らせたり全身の伸びをさせる。母親は子どもの足を持って振り、子どもには母親の肩をたたかせる。立ち上がって深呼吸	母親に感謝の気持ちを持つようになる
挨拶	「気をつけ」の姿勢をとり挨拶、子どもと握手して終了	『気をつけピッ!』と声を掛け、正しい姿勢をとらせる。『ありがとうございました』、『さようなら』と大きな声で挨拶をさせる	「気をつけ」の正しい姿勢がとれ、大きな声で挨拶ができるようになる

ケーションのとり方が変わった。性格は、元々明朗で活発、社交的であったが、より一層活発になった。

⑤対象E（2歳2ヶ月～2歳7ヶ月：男児）

料理や掃除を母親と一緒にするようになり、親子の会話も多くなった。4月の時点ではいわゆる「内弁慶」だったが、外でも活発にのぼり棒や相撲などをして遊ぶようになった。

⑥対象F（2歳3ヶ月～2歳8ヶ月：男児）

音楽を聴いたり、身体を動かしたり、何かを表現して遊ぶようになった。また、母親と身体を動かして遊ぶようになった。4月に比べ社交的になってきた。

⑦対象G（2歳5ヶ月～2歳10ヶ月：女児）

身体を動かすようになった。また、母親がよく抱きしめてあげるようになった。性格は、4月と変わらず内向的である。

⑧対象H（2歳6ヶ月～2歳11ヶ月：女児）

自転車に乗ったり、自分で本を見たりするようになり、母親に本を読んでもらうことが楽しくなった。元々マイペースで、自分のやりたいことしかやらず、嫌な時は泣いていたが、徐々に落ち着いて人の話が聞けるようになった。

⑨対象I（2歳8ヶ月～3歳1ヶ月：女児）

1年経過後の4月に比べ、日頃の活動は、ままごとより、歌ったり踊ったりするようになった。また、独り立ちが早く、何でも一人でしたがるようになった。4月に比べ面倒見が良くなった。

⑩対象J（2歳9ヶ月～3歳2ヶ月：女児）

日々の活動は、自分で遊ぶようになり、歌ったり、踊ったりするようになった。また、一人で留守番をしたり、親子ダンス教室の用意もできるようになった。1年経過後の4月の時点では、初めて会う人に対して人見知りをしていたが、今では社交的になった。

2. 積極性、自主性、協調性、創造力の変化

表3に、積極性、自主性、協調性および創造力の受講後の変化に対する感想を示した。自主性が養われたと強く感じる母親が8名と最も多く、積極性、協調性、創造力については、「とても思う」と「少し思う」がそれぞれ約半数であった。

表3　親子ダンス教室に参加したことによる変化

	とても思う	少し思う	思わない
積極性	5	5	0
自主性	8	2	0
協調性	5	5	0
創造力	4	5	1

（人）

Ⅳ. 考察

ピアジェとインヘルダー[2]は感覚・運動的操作から思考への発達と転化を促すものは「象徴機能」であり、2歳から5歳にかけて急速に発達し、この発達期を最も特徴づける活動を「遊び」と「模倣」であるとしている。さらに、子どもの創造的思考力を育てるにあたっての大人が注意すべき点を、『おとなの考えを一方的に子どもに押しつけないことである。すなわち、各発達段階に応じて、その子ども自身の興味なり関心なりが何であるかをよく見きわめ、充分に心得たうえで、子どもが自分の力で自主的に問題を解決することができるように、おとなが仕向けてやることがたいせつである。（中略）子どもが自分ひとりだけで行動するのでなく、数人で集団的に活動するように仕向けることである。』と述べている。また、ピアジェ[3]は子どもの遊びについて、知的発達に伴って、「機能遊び」、「象徴遊び」、「ルール遊び」と3段階で変化していくとし、その中で、特に象徴遊びについて、『模倣、見立て、想像、空想などが伴う遊び、また、ごっこ遊びをすることを子どもの遊びの黄金期』としている。さらに、白川ら[4]は乳幼児の遊び活動の本質を次のように分類している。

①他から強制されない自由な活動
②自発的な活動
③活動自体に目的があって賞罰を必要としない、内発的動機づけによる活動
④子ども自身の興味や関心に基づく活動

親子ダンス教室では、子どもの興味と関心に基づいた上で、子どもが日頃の自分の行動を思い出したり、ある物の模倣をしたり、また、空想したりできる内容を取り入れながら、自主性や積極性、協調性を

養うことを目的としている。これは前述した子どもの遊びの内容と一致するものと考えられる。上記先行研究[2～4]を元に、母親への面接法によるアンケート結果を分析すると、親子ダンスの活動内容が、積極性、自主性、協調性および創造力に及ぼす効果について、次のことが考えられる。

1.　積極性について

変化の大小は子どもごとに異なるが、全員が親子ダンスにより積極性が身についたと感じていた。これは親子ダンスの活動内での「グーチョキパー」や「アブラハム」の活動と関連があると考えられる。これらの活動では、指導者から「やりたい人は手を挙げて」と促している。この呼びかけに対して、子どもが進んで手を挙げるようになったことが積極性の変化につながったのではないかと考えられる。

2.　自主性について

10人中8人が親子ダンスによる大きな変化を感じていた。これは活動内の「自己紹介」と関連があると考えられる。子どもに自分の名前や年齢、好きな動物、好きな食べ物、好きな遊びを発表させ、子どもがそれに答えることができるようになったことが、自主性の向上につながったのではないかと考えられる。また、「グーチョキパー」や「アブラハム」もこの項目と関連を持っていると思われる。

3.　協調性について

全員が親子ダンスにより、協調性が身についたと感じていた。これは親子ダンスの活動全体を通して関連があるものと考えられる。具体的には他の子どもと手をつなぐこと、「ボール遊び」においてボールキックの順番を守ること、また「リズムダンス」の際に輪になって仲良く踊ることが挙げられる。

4.　創造力について

「思わない」と答えた母親が1人いたが、大半の母親が「創造力が身についた」と感じていた。この項目については活動内の「自己紹介」や「グーチョキパー」が関連していると考えられる。「自己紹介」については、好きな動物、好きな食べ物、好きな遊びについて形を模倣させたり、動きを自分で考えて表現させたりする。また、「グーチョキパー」についてはグーチョキパーの組み合わせの形を考えさせる。これらの活動が創造力の向上につながったのではないかと考えられる。

Ⅴ．まとめ

本研究は、「親子ダンス教室」に通う10組の親子の17ヶ月または5ヶ月間の成長を追いながら、子どもの成長・発達と母親との関係構築に与える効果について、母親自身がどのように捉えているのかを調査した。また、親子ダンス教室の活動内容との関連を検討した。その結果、次のようなことが考えられた。

1. 「自己紹介」や好きな物を発表・表現することにより発言力や模倣する力、自主性や創造力が身についた。

2. 「グーチョキパー」や「アブラハム」を発表することにより、積極性、自主性、創造力が身についた。

3. 他の子どもと一緒にダンスを踊ったり、順番を守って活動することにより、協調性やルールを守る姿勢が身についた。

4. 親子ダンス教室における様々な活動をすることにより、日々の生活が行動的になり活発になった子どもが増えた。また、親子で一緒に遊んだり、話をしたり、抱きしめてあげるようになり、コミュニケーションのとり方が変わった。

子どもは、一人一人成長・発達の速度は違う。また、性格や日々の生活のスタイルが違うため、決して一括りにはできない。そして、子どもに関する多くの研究も、全ての子どもに当てはまるものではない。しかし、子どもは日々成長し続けており、「親子ダンス教室」に入会した目的は様々であるが、子ども達が

人との関わり合いや、多くの活動を通して成長していく姿が確認できた。母親にまとわりついていた子どもも、何かをきっかけに母親から離れて活動することができる。それは、無理矢理引き離すのではなく、子どもの方から自然に離れていけるようでなければならない。ここには、子ども自らが興味や関心を抱けるような様々な活動の提供が大きな鍵となっているのではないかと考える。

Ⅵ．引用・参考文献

1） マーラー、M. S.（1981）：乳幼児の心理的誕生.（白川蓉子、稲垣由子、北野幸子、奥山登美子（2004）：育ちあう乳幼児教育保育. 有斐閣コンパクト、p224-p225.より引用）

2） J.ピアジェ（1936）：子どもの知能の発達.（小野寺敦子（2009）：手にとるように発達心理学がわかる本. かんき出版p117.より引用）

3） J.ピアジェ、J.ブルーナー（1976）三嶋唯義編訳：発達と学習の心理学. 誠文堂新光社、p19-p20.

4） 白川蓉子、稲垣由子、北野幸子、奥山登美子（2004）：育ちあう乳幼児教育保育. 有斐閣コンパクト、p45.